

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



五月の下旬、万作は槇子の車で窪野へでかけた。車だと道後から四十分ほどの道のりである。

入口の丹波から、道は左右に岐わかれている。左の段丘を三キロメートルほど登った行き止まりが北谷で、そこから道は森の奥へ消える。右の谷川を渡って奥へと進むと村下の集落へ着く。

槇子の車は左へカーブし、早苗が風になびく段々畑の間の坂道をくるくる登っていった。

「閑室跡」はすでに基礎工事が終了し、二メートルほどの白っぽい花こう岩の記念碑が建っていた。

表には「一遍上人窪寺閑室跡」と、流麗な文字が彫りこまれている。その上部の長方形の切り込みには、聖絵の「窪寺閑室図」を模したブロンズのレリーフが八月七日の記念碑除幕式の時までにはめこまれるはずだ、と槇子が説明した。

ぴたつと風がやみ、初夏の日差しが山野に照りつけている。

(ここだとたしかに環境状況は申し分ない……)

万作は川瀬の考証の正確さを目で確かめながら、自分の南予説がぐらつくのを感じた。

かれは額の汗をぬぐいながら槇子に尋ねていた。

「まだ予感がしますか」

いくぶん、自分自身と彼女が寄こした手紙の内容へ皮肉をこめたつもりだった。ところが、槇子はすぐふりむくと、

「ええ、今でも」

燃えるような眼差しで万作を見つめるのだった。

目的地は村下だった。

道順を詳しく聞かため、丹波の石材店に立ち寄った。

ほの暗い作業場からつなぎ服の石工が現れ、やあつと槇子に声をかけ、万作に一礼した。正岡青年である。かれは窪野全体の地図を書きながら、村下集落は昔からまわりの集落との付き合いも少なく、訪れる人はめったにいない。その上、ここ最近の急速な挙家離村で集落の大半は空き家になっているはずだと教えてくれた。正岡の祖母が銀蔵老爺の噂を聞いたのも、祖母によくよく聞いてみると、ずっと昔のことだった、と青年はすまなさそうにいった。万作は正岡の話に心もとない気になった。

キュンとタイヤを軋きしませ、槇子は車を発進させた。

丹波を出て、木橋を渡る。林道をまっすぐ十分ほど走った。

不意に林が途切れ、谷間の台地に出た。周囲にすぐ山が迫っていて広くはないが、絵になるような農村風景である。

山野の燃えるような新緑に谷を渡る風がきらめいている。

二人は思わず顔を見あわし地図を確認した。村下かやに間違いなかった。

車をおいて畔道を歩いた。桐林にかこまれて茅ぶきの農家が山際に何軒か見える。耕作を放棄した田や畑のなかに、まだらに稲田がある。その横の農道を歩いていると、クヌギ林の続く小道から村人があらわれ、こちらに近づいてきた。顔がわかるほどの距離になって、男は立ちどまった。じっと、こちらを見ている。肩に背負った負い子から大ききの異なる鎌の柄が三本のぞいていた。

あのう、と榎子が呼びかけた。強い日差しをまともに顔へ受けた農夫は額に手をかざして、二人をじっと見ている。

いかにも胡散うさんくさそうな視線だった。

ところが、

「一遍さんのことを調べている者なんです……」

榎子が切り出すと、

「あれ、一遍さんかいの」

と農夫はたちまち表情をゆるめた。そして親しみのこもった声で、一遍さんよの、とくりかえした。

「この村に、詳しい方がおいでになると聞きました」

と万作が話を向ける。農夫はここぞとばかりに、

「そりゃあんた、銀蔵さんに訊いたら、よう知つとらいな」

とすぐに別府銀蔵の名をあげた。

「その銀蔵さんの家、どこでしょうか」

万作は点在する農家のほうへ視線を移した。農夫は雑草が生い茂る畑の奥の茅ぶきの農家を指差していった。

「あそこやけど、今はもうだれもおらんぞな」

農夫によれば、銀蔵はつれあいに先立たれてすっかり身体が弱り、息子夫婦のもとへ引き取られていった。もうかれこれ十年以上も前のことで、その後の消息は村に伝わってこないという。

正岡青年が心配したとおりである。

農夫は畔道を左へ折れ、背の鎌の刃を光らせながら里山へ入っていった。

「行きましよ、先生」

立ち尽くしていた万作を榎子がうながした。

せつかくここまでできたのだから、空き家であれ銀蔵の家を見ていこうという。

畔道をでて桐林のつづく農道を歩いた。ぼつりぼつり、背の低い農家が林の奥で息をひそめている。銀蔵の家はその一番端だった。窪んだ屋根には子供の背丈ほどの雑草が生えている。板戸や土壁にはびっしり蔦がからまつていた。二人は言葉もなく、雑草で行く手をはばむ庭先へつつ立っていた。

草いきれにむせる思いがする。二人は来た道を集落の入口まで引き返した。その時のことである。

集落の景色を眺めていた榎子が声をあげた。

「先生、ほらあそこ、銀蔵さんの家の西、わかりますか。あそこだけ白い花が咲いている」

「白い花、うん、なるほど」

緑したたる初夏の山野のなかで、榎子が指差す一角にくつきり白い点を打つように、花の群生が見える。

「何の花かしら」

「きつと蕎麦そばだろう」

「蕎麦の花……でも不思議、まるでいま咲いたみたい」

榎子は首をかしげて、万作をかえりみた。

いわれてみると、そのとおりだった。来たときに見落としていたに違いなかった。その白い花の群生が万作の頭に、しみのように残った。

南予の大久保山に行つてみたい、といいだしたのは榎子である。

車はそのとき、目の底まで緑にそまりそうな山中を走っていた。

榎子は万作が地域の歴史文化情報誌に寄せた随想を読んで、一遍のように大久保山から宇和海を眺めてみたいのだという。山はいま山頂にテレビ局の中継基地が建てられ、車で一気に登れるようになっていた。万作は二つ返事で承諾した。

林道をぬけ丹波が近くなった。

「大久保山は、成道地にふさわしいところだ。若いあなたの目でみれば、新しい発見があるかもしれないな」

万作は本当にそのような気がした。

車は谷川に架かる木橋を引き返す。

「わたし、楽しみだわ」

と榎子はうちとけた声でいう。車は速度を上げる。まるでこのまま南予までつっぱしっていきそうな勢いである。

「銀蔵さんのほうは、もう気がすみましたか」

万作は榎子の気持ち確かめる。

邪馬台国論争に代表されるように、歴史の謎解きにはみんな興味がある。人

それぞれに、歴史の霞の向こうにロマンを広げてみたい。万作は農夫の銀蔵も窪野のそうした郷土史家の一人でなかったかと思う。

槇子は車のスピードを落とす。

助手席へちらつと視線を走らせ、

「変なことという奴だって、笑ったらいやですよ。あの白い花をみたときはっとしたんです。銀蔵さんはもう亡くなっているって、そんな直観が……」

「直観ですか、なるほど」

「でもいま、反省しています。直観も大切だけど、歴史は科学ですもの。わたしがいうのは変ですが、史料の分析や調査が第一です」

視界がひらけ、車は丹波にでた。槇子はつぶけた。

「銀蔵さんのことは正岡さんに協力をお願いしようと思います。村下を出たあとのことを追跡調査してみる必要があります」

その正岡石材店の前に車はさしかかった。寄っていくのかと思っただけ、槇子は通り過ぎ広い国道にでた。万作を道後まで送るといふ。万作は槇子の好意を断って、郊外電車の駅で車をおりた。丹波の方向へユーターンした彼女の車をそれとなく目で追いながら、万作は正岡や槇子の若さに軽い嫉妬をおぼえていた。